
Doll March 人形行進

瑞樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D o l l M a r c h 人形行進

【Nコード】

N 5 6 2 8 D

【作者名】

瑞樹

【あらすじ】

持ち主に知られないところで動いている、人形たち。そんな、人形たちの目線から見たこの世…。コメディあり、恋ありの小説。

Doll March 一章 人形3人組

さあ、夜がやってきたよ。一緒に行こうか。夢の町へ

今日は、いつもより肌寒かった。秋といったって、十一月。そろそろ、雪が降ってもいい時期じゃないか？

僕の名前はソラ。アンティークドール。金髪で青い目。

僕は今、窓際に忘れられたようにおかれている。僕の隣には他のアンティークドールたちも居る。そいつらも僕と同じように忘れられていた。

「暇よねえ……」

緑のリボンを頭にして、緑と白のドレスを着て、僕の隣に座っているのはミドリ。金髪の毛先クルクルヘアに、緑色の目。緑一色。名前はみんな、持ち主に決められてるんだけど……ネーミングセンスが……。

「しょうがないだろ？今、持ち主が出かけていて、しゃべれるだけでもありがたく思えよ」

「そうね。でも……暇」

「暇、暇、うるさい」

「ソラは暇じゃないの？」

「暇」

「ほらみなさいよっ！」

まあ、暇なのはしょうがないじゃないか。暇なんだから……。

「……せっかく昼寝してたのに、お前らのせいで起きたらろっが」

眠たそうな目をこすって起き上がったのは、ユウ。金髪に黒いタキシードを着ている。目の色は茶色。

「昼寝って……まだ朝なんですが？」

僕が言うと、ユウはブスツとした顔を見せた。

「俺が昼寝っていったら、昼寝なんだよ」

「お前中心に世界は回ってないぞ？」

「俺中心で回ってると同じだ」

「同じじゃない」

僕たちはにらみ合った。なんで、ユウはいつでも俺様なんだ。まったく、困るよ。

「落ち着きなさいよ。別にどっちだっていいでしょ？」

ミドリが言うと、ユウの視線が緑に向けられる。

「ふざけんなっ！どっちでもよくないんだっ！」

「私がどつちでもいいと思ったら、いいのっ！」

おいおい、ミドリも俺様タイプか……。平凡は僕だけか。

「おい、そこでまったりしているソラ。今、お前、自分のことほめてるかもしれないけど、あんまり勘違いしないほうが良いぞ」

「なっ！」

「うん。ソラ。勘違いしないほうが良いと思うよ」

「ミドリまで！僕は一番平凡だ！」

「いやいや、違っただろ。なあミドリ」

「うん」

なんだ、こんなときだけ意気投合して！

「たっただいまー！」

下で持ち主の元気な声が聞こえる。僕たちはその声を聞いて、体を固くさせた。

僕たちは、主の前では動いてはいけない。体を固くさせて、どんなことがあっても動いてはいけない。持ち主の前で動いた日には、自由が消される。つまり、体が自分の思い通りに動かなくなるんだ。

「じゃーんっ！さてさて、今日は久しぶりにこの子達のおていれしましょうか」

持ち主は部屋に入るなり、窓際に座っている僕たちを見た。そして、近づいてきた。

「ソーラー君 ミードリちゃん ユーウー君」

相当ご機嫌だな……何か良いことでもあったのだろうか……？

「今日ねえ、あたらしいお友達が増えますよー。しかも……三人」

ふ、普段お手入れしないのに、新しい人形をつれてくるのか！さすが、金持ちの娘。新しい人形つれてくるなら、まずは、僕たちの新しい服を買ってくれ。去年から全然、変えてないんだぞ。

「新しい子にはねー、新しい服をいっぱい買ってあげましたっ！」

……きつと今頃、他の二人も同じことを思っているだろう。ふ・ざ・け・ん・なっ！

「じゃあ、今から新しい子をつれてきまーすっ！」

そういつて、部屋から出て行ってしまった。僕たちのお手入れはどうした。

「……家出したいと思うのは俺だけか？」

ユウの声は心なしか震えている。

「うつん……私もだよ？」

ミドリは笑顔だが、声が怖い。

D o l l M a r c h 二章 新しい仲間 1

黒いミドリは怖いんだよね。なんか、緑の目がどす黒い緑色に見えるのは、僕だけだろうか……？

「ところで……新しい子ってどんな子だろう……？」

「ミドリみたいな奴以外希望」

ユウが言うと、ミドリがキッとユウをにらんだ。

「どういう意味よ！」

「そのままですよー」

ユウは勝ち誇ったような顔をする。ミドリは悔しそうに下唇をかんだ。……また始まった……。

「ん？あつ、電話きた」

ユウがそういつて、一人で話し始めた。

僕たちみたいな、動ける人形は神様が自由（自分が思ったとおり
に動ける力）を与えてくれたんだ。そして、いつでも神様と連絡が
つけるように全員に電話機能をつけた。この機能は、本人にしか聞
こえない着信音が鳴って、頭の中で操作すると神様と話せるようにな
っている。当然、僕たちのような人形同士でも電話できるんだ。

「えー。ミドリも連れて行くんですか？」

ユウがあからさまに嫌な顔をした。

「神様……ええ……そうですか……。それは……なるほどー……じやあ、連れて行きます」

めずらしい。ユウがミドリを連れて行くことに納得したとは……。おっと、言い忘れた。神様はミドリがお気に入らしい。犯罪に入るほど。こないだは……ストーカーしてきたっけなあ。

「私、絶対いかないわよっ！」

ミドリが必死で反論する。だが、ユウには届かないらしい。

ユウがミドリを神様の前に連れて行く理由は……ユウじゃないと、ミドリは逃げるかららしい。まあ、僕が前連れて行ったときは、逃げられたし。

「では、後ほど」

ユウがそういつて、ミドリのほうを向いた。

「な、なによっ！」

「さっ、いこうか」

ユウがこんなにいい笑顔をするなんて……連れて行ったらなにかもらえるんだな。

「ミドリ」

「ソラっ！助けてくれるのね！」

「」愁傷様

「ええ！ひどいわよっ！みんなして！」

ユウがミドリの腕をつかんだ。

「よし、いこうか」

ミドリが必死に抵抗するが、力の強いユウには効かないらしい。

「離してよっ！」

「嫌だ」

……これさ、目を瞑っていれば、泣いてる彼女となくさめてる（？）彼女に聞こえるよね。持ち主はこういう系の話が好きらしいから、よくテレビを見てたなあ……。

「ソラっ！助けてよ！」

「やだよ。大丈夫。安心して逝ってらっしゃい」

「ちょっと、言い方がおかしいでしょ！安心なんかできないわよっ！」

ミドリは騒いでいたが、ユウに引っ張られて窓から飛びだってしまった。

そつだ、僕たちには神様のところへ行くために、羽が機能されている。……機能って言うと、ロボットみたいだけど……まあいいや。

僕たちの羽は神様のところに行くときだけしか、機能できないんだよねえ。

「ただいまー！」

あ、持ち主が帰ってきた。手には一人の人形が抱えられていた。

「あれ……？ミドリちゃんたちは……？」

やばいつ！そうだ、忘れてた。どうしよう、ばれる可能性が……。

「まあ、いつか」

いいのか、いいのか？おいおい。

「じゃ、サクラちゃんここにしようねえ。お友達がたくさんいるよ
お」

名前はもう考えずみか。サクラちゃんねえ……。
僕の隣に置かれた女の子は、茶髪のストレートで目が紅色。ひらひらしたピンクのドレスを着ていた。そして……すごく、かわいかった。この子は話せるのだろうか？

「じゃあ、他のお友達も持ってくるねえ！」

まだいるのかあ！どれくらい、買ったんだ。
持ち主が部屋から出て行くと、その子は瞬きをした。

「あ、はじめましてです。名前はさくらなの」

凜としたきれいな声、胸の高まりがやまない。……人形って病気にでもなるのだろうか……。

「はじめまして。僕は、ソラ」

目を合わせたら、なんか死にそうな気がした。

「ソラさんですねえ。俺、こういうところ初めてなの」

え？今、俺って……。

D o l l M a r c h 二章 新しい仲間 1（後書き）

登場人物紹介

ソラ 金髪の青い目。自分の女の子のような容姿が嫌い。英国少年
のような服装を好む。

D o l l M a r c h 三章 新しい仲間 2

サクラは「俺」と自分のことを呼んだ。いやいや、何かの聞き間違えかもしれない……。人を見かけで判断するのは、いけないが、これは……顔と呼び方があっていない。

「ソラさん？」

「君……自分のことをなんて呼んでる？」

「ふえ？自分のことですか？」

「うん」

「俺です」

……素晴らしい笑顔つきだね。こんな……か、可愛い子が俺だなんて……。神様っ！何をたらしこんだんですか！

「俺、自分のことこういう風に呼ぶの、結構好きなの。俺、見た目からして弱くて……。だから、少しでも強くなりたいのっ！」

サクラは紅色の目を僕に向けた。その目は力強かった。

「そうなんだ……」

「うんっ！あの、こっつてソラさんしかいないの？」

「いや、他にも居るけど……今出かけ途中」

僕は窓の外を見た。なんか、ミドリの叫び声が聞こえてきそう。

「ソラさん？」

サクラは僕の顔を覗き込んでくる。

「ソラさんは可愛い。俺もかわいくなりたいの」

なりたかったら、自分のことを「俺」と言うのをやめなさい。

「ソラさん。きっと、いいお嫁さんになれるのっ！」

そうだな……なれたらいいなあ。……ん？

「はああああっ？」

「ふえっ！」

「だ……ただ誰が女だと！僕が？僕が女に見えると！どこをどう見たら？え？えっ？」

「ふえ……ソラさん、女の子じゃないの？」

「ちがうっ！」

「……俺、ソラさんだったら、お嫁にしても良いのっ！」

ちょ、僕の心が軽く傷つく。何だこの子。さらりと、僕の地雷踏んどいて、笑顔でいるぞ！

「やめてください」

「なんで？可愛いのに……」

再び地雷踏んだよ、この子。しかも、妙にしょんぼりしてるの
ですが！

「きゃあああああ！」

いきなり叫び声が聞こえた。ま……まさか、持ち主に動いている
のがばれたっ？自由が……。

「ソラが……ソラが……」

声のする方向を見ると、ユウとミドリがいた。窓の向こうで飛ん
でいる。

「あけてくれ」

「……なんだ……あ、うん」

僕は返事して、窓を開けた。すると、ミドリは凄い速さでサクラ
を抱きしめた。

「ソラ……なんで、誘拐なんてまたしたの！」

はっ？

「あの時……ちかったじゃねえか……もう、誘拐しないって」

「いやいや、なにになに？この人たち。僕が誘拐したと？しかも、またってなんだよ！」

「大丈夫？」

ミドリがサクラの髪をなでる。

「え……？え？」

サクラが混乱する。

「ソラッ！もう、こんなことはやめて……」

「君たちの勝手な想像もやめて」

「お前、また……くっ」

「ユウ、泣くまねしたって、涙出てないから。それから、なんだよ、またって。記憶を作るな」

「違う……記憶は作るものじゃないのよっ！生み出すものなのっ！」

ミドリ、なにかっこつけたことってんのさ。特にかっこよくないからね。ユウも同感しないで。そして、サクラは目を輝かせない。

「俺……おねえさまについていくの！」

「ええ、ついてきなさい」

おい、何青春してるんだ。誘拐した疑惑を作り出しておいで、そ
うちは青春ですか？

「ほほえましいじゃねえか……」

ちよ、ユウ。なにホロリしてんのさっ！

ガチャッ

部屋のドアが開く。僕たちは再び体を硬くする。

「あれ？ミドリちゃんたち戻ってる」

持ち主……さすがに気づくよね？

「帰ってきたのか。おかえり」

うわぁ……メルヘン。

「はい、次のお友達 チョウちゃんこの子たちが友達だよ」

持ち主の手から下ろされたのは、見たことない女の子だった。雰
囲気が僕たちと全然ちがうんだ……。

「じゃねえー！」

そういつて、持ち主は出て行った。

「……ふわぁ……」

チョウだっけか……？女の子は、あくびをした。女の子は、黒い
髪の毛でおかっぱっていうのかな……？で、黒い目。黒い着物に赤

い蝶が描かれている服を着ていた。

「な……なにもんだ、お前は！」

ユウはチョウを指差した。人を指差しちゃいけないよ、ユウ。

「……ん？我か？我は持ち主に名前をきめられた。名前はチョウじや」

また、人形が増えた……。しかも、しゃべり方が…不思議な人形が……。

D o l l M a r c h 三章 新しい仲間 2（後書き）

登場人物紹介

ミドリ。金髪で毛先がクルクルヘアの女の子。目が緑色。シンプルなドレスを好む。

D o l l M a r c h 四章 新しい仲間 3

チヨウと名のつた少女は、大きなあくびをした。

「そ、そんなこと聞いてんじゃねえよっ！」

ユウはチヨウを指差す。チヨウはユウを無視して、僕を見た。

「その人」

チヨウの目は強い力を持っている。目をそらすなと脅されているような気がする。

「なに？」

「名は？」

「僕の名前はソラ」

僕がそういうと、チヨウがうつむいて、考え事を始めた。ユウはチヨウに無視されて、震えてるし……。おもしろ。

ふと、チヨウが顔を上げて僕の顔を見た。

「我の嫁にならぬか？」

「なりません」

なんだ、こいつは。初対面で、嫁になれと？いや、そこじゃない問題は（サクラだって言ってたからね）なんで、僕がまた女に見ら

れるんだっ！

「駄目なの！ソラさんは俺の嫁なの！」

サクラがチョウの袖を引っ張りながら言った。いやいや、違うから。

「ソラ、モテモテだね」

ミドリ。ちょっと、違うぞ。これは……嫌がらせじゃないのか？

「ソラは嫁にやらんっ！」

「ユウーツ！のるなボケナス！」

「ボケナスではありません」

「カボチャーツ！」

「カボチャに失礼じゃ。ソラ」

チョウがまったりという。あ、そうだね。カボチャさんごめんなさい。

「お前らのほうこそ、俺に失礼だ」

「いや、ユウに対して失礼なことはないから」

「いやいや、それおかしいだろっ？」

「おかしくないって」

僕はにこりと笑顔で言った。その笑顔にチヨウが便乗する。

「お前ら笑うな。怖い」

うわっ！今、結構グサリときたぞ……。笑顔が怖いといわれまして。僕はこれから笑えるのでしょうか？

「あーあ、ユウがソラを落ち込ませたー」

ミドリがユウを指差す。そうだ、そうだっ！もっといつてやれ。

「でも、ソラさんはユウさんにそれなりのひどいことを言ったのっ！おたがいさまなの」

あれ？サクラは、ユウの見方なのか？

「……そのピンクの人の名はなんじゃ？」

チヨウがサクラを見る。

「俺？俺はサクラなの」

「……サクラ。女の子が俺と言っちゃ駄目じゃ」

チヨウがサクラを強い目で見ると、サクラは言い返さないように、涙目になる。

「なんで？だって……つよくなるんだもんっ！」

「許す」

許すのかよ。チヨウも簡単に折れる奴なんだな。って…ミドリなに微笑んでんの？なんか、ほほえましいような目で見てますけど…。

「青春」

「違いますよ。ミドリさん。おーい、何かつてに青春と決め付けてるんですかね？」

「ソラ。黙ってて」

「いやいや、ちょ、なんで、僕にらまれなくちゃならないのさ」

「ソラがうるさいから」

つくづく……ミドリが分からない。なんか、最近反抗期なのですか？ユウとミドリが。

「反抗期？別に反抗してるわけじゃないよね」

「なっ……なんで、僕の心が……？」

「口に思いつきり出たよ」

ミドリが呆れるようにいう。あー……ミドリに呆れられるって、ある意味傷つく。

「で……ソラ。我の嫁にならぬのか？」

「でって……話戻さないでよ。僕は、男」

「え？」

「おーとー」

チヨウは目を丸くさせた。もともと丸いけどね。

「そうなのか……ドンマイじゃ」

「え？なにその慰め」

「慰めてるのではないぞ。どうじょ」

ガチャ

部屋のドアが開く。僕たちはまたまた体を固くさせる。持ち主の手には男の子が抱えられていた。金髪のような黄色の髪。目の色は右目が赤。左目は眼帯で隠れてて分からない。服装は、僕と似ていた。

D o l l M a r c h 四章 新しい仲間 3 (後書き)

登場人物

ユウ 金髪に茶色の目。服装は性格に合わずタキシードなどを好む。

Doll March 五章 動かない人形

第一印象は、僕と同じ苦勞人になりそうな子だった。

「この子が最後の子だよ。名前はツキ君。みんなで仲良くするんだよ？あつ、これからママと一緒においしいもの食べにいくんだあ」

ソウデスカ。いつてらっしゃい。僕たちはまた動けるし……また、嫁発言があるかもしれないけど……無視していこう。

持ち主の腕にかえられていた子は、僕の隣に置かれた。

「よっし。増えたあ じゃあ、いつてくるね」

持ち主はそういつて、騒がしい音を立てながら部屋から出て行った。

「……」

ツキはしゃべらない。みんなここに来て、持ち主が出て行った後動いた。あまり人前ではしゃべりたくない子なのか……？

「おい、ツキ」

ユウはツキの前まで歩いてきて、肩を揺さぶった。

「おい、聞いてんのかよ？」

ユウ。初対面の人を乱暴に扱っちゃいけないよ。

「……その人。返事をしろ」

チヨウがツキを指差す。だが、動かない。ユウはそれにイラツときたのか、ツキの肩を押した。すると、ツキはころんと倒れた。

「……動けないのか……？」

ユウが言っても、ツキは反応しなかった。

「なんだっけ……動かない子は何があつたんだっけ……？」

ミドリが言うと、サクラがチラッとミドリを見た。

「……悪いことをした子なの」

全員の視線がツキに集まった。

「俺……神様にかけてみようか？容姿を言えば神様は分かってくれるだろ？」

言った後、ユウは目をつぶって静かになった。倒れているツキ以外はユウを見ていた。

「……あ、もしもし。俺です。ユウです。あの……赤目で眼帯をしている男の子がウチにきたのですが……ええ……はあ……一生ミドリをそちらに連れて行きません」

そういつて、ユウは目を開けた。なんだ、何が起こったんだ。ユウの目は明らかに怒っていた。

「どうしたの？」

ミドリがつぶやくように聞いた。

「……なんか……目の色が両方違うようにできちゃったからだそう
だ」

ユウが小さな声で言うと、僕たちは目を大きく見開かせた。

「はあああああつ？」

僕が大声を出す。

「ひどいの……差別なの！」

サクラはツキに駆け寄った。

「かわいそうなの……ツキ君かわいそうなの」

「ふふふ、私、絶対神様のところへもういかない」

ミドリがニッコリと空に微笑んだ。

「我が神に頼んでこよう。この人を動かすように」

チヨウは静かに窓を開けた。空は天気がよくて、太陽の光がツキを照らしていた。

「僕も行く」

僕もチヨウについていこうとしたが、チヨウにとめられた。

「我が一人で行く」

そういつて、チヨウは飛んでいってしまった。

D o l l M a r c h 五章 動かない人形（後書き）

登場人物紹介

サクラ 茶髪の腰までのストレート。目が紅色。服装はひらひらしたドレスを好む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5628d/>

Doll March 人形行進

2010年10月12日07時22分発行